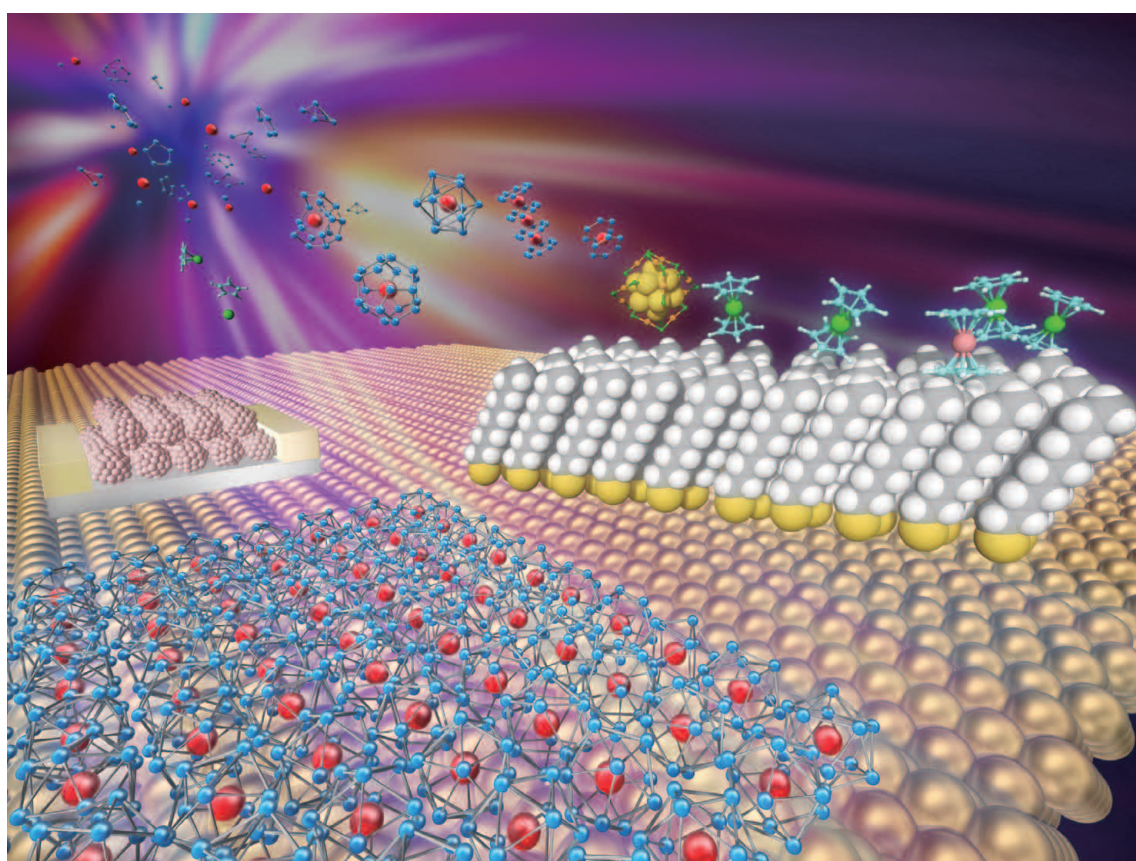


理工学部報



第66号

2017年9月20日



慶應義塾大学

物理のはざまに現れる形の科学 — 柱状節理・田んぼのひび割れ・ 茶碗の貫入



システムデザイン工学科
小國健二

私たちが目にする自然現象の中には、材料は違えども、スケールは違えども、共通する「不思議な形」が現れることがあります。

世界の名勝奇勝には、巨大な岩に亀裂が形成されて、岩が多数の多角柱に分割され、まるで鉛筆を束ねて立てたかのようになっている地質構造、柱状節理がよく見られます。柱状節理は「溶岩が急冷されて造られる特異な地質構造」と説明されています。一方、スターチの粉末を水に溶かしてそのまま乾燥させると、柱状節理にそっくりな形が現れます。名勝奇勝の柱状節理の多角柱断面の一边の長さは数十センチ程度、スターチの柱状節理の一边の長さは数ミリ程度です。

柱状節理を真上から見ると、「平面が多角形のセルに分割されている」ことが分かります。乾燥した田んぼや干潟の表面に現れる亀裂も、陶磁器の表面の釉薬がひび割れて造られる模様、「貫入」も、「平面が多角形のセルに分割」しています。そして田んぼのひび割れも茶碗の貫入も、ひび割れは深さ方向にまっすぐ伸びているので、それぞれの多角形のセルは「とても背の低い柱状節理を真上から見たもの」と言えます。

名勝奇勝の柱状節理、スターチの柱状節理、田んぼや干潟の乾燥亀裂、陶磁器の釉薬の味わい深い貫入。材料は全く違います。サイズもばらばらです。しかし、目に見える形には共通性が感じられます。この共通性の源は、これらの現象の背後にある物理です。

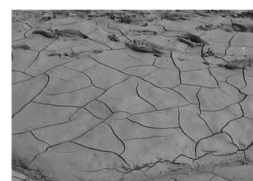
これらの不思議な形は全て、「拡散・変形・破壊」という3つの物理の連成、マルチフィジックスの結果として形成されています。この問題は、「不連続場の進展を伴うマルチフィジックスにおけるパターン形成」の問題であり、私が専門とする数値解析における最も難しい問題のひとつなのです。

「柱状節理、田んぼのひびわれ、茶碗の貫入…。何の役に立つの？」という声が聞こえてきそうです。しかし、私の研究グループではこれを、非平衡非定常開放系のマルチフィジックスにおけるパターン形成を扱う一般的な方法論を構築するための第一歩と考えています。

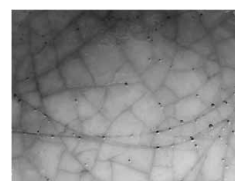
名勝奇勝の柱状節理



スターチの柱状節理



干潟の乾燥亀裂



茶碗の貫入

コラム 2

物理のはざまに現れる形の科学
— 柱状節理・田んぼのひび割れ・茶碗の貫入
小國 健二

巻頭メッセージ 3

「3つの目」
理工学部長 伊藤 公平

常任理事メッセージ 4

教育と研究の融合
青山藤詞郎

TOPICS 5

学生への支援で見る理工学部の国際交流事業
小尾晋之介
(特集) 世界に羽ばたけ リーディングプログラム
オールラウンド型リーディングプログラム
「超成熟社会発展のサイエンス」 神成 文彦
グローバル環境システムリーダープログラム
(GESL) が目指すもの 植田 利久
学生支援について～奨学金ならびに学生寮の現状と展望～
千田 憲孝

教育への新しい風／教員からのメッセージ 9

数理科学科／基礎理工学専攻 垣村 尚徳
応用化学科／総合デザイン工学専攻 蛭田 勇樹
外国語・総合教育教室 杉山有紀子

理工学部の近況 10

各学科主任・日吉主任・各専攻長他からのメッセージ

就職状況 14

最近の就職状況について 津田 裕之

受賞 16

人事 17

訃報 18

矢上賞 18

同窓会研究教育奨励基金による卒業生への表彰

理工学コロキウム 19

人とインタラクションできる人工知能
今井 倫太

お知らせ 20

日吉は今「総合教育科目に関する改革」
第18回矢上祭の開催について
KEIO TECHNO-MALL 2017 (第18回 慶應科学技術展) 開催について

※表紙は気相中で化学合成されたナノクラスターが固体表面上でナノ構造体を形成する様子をイメージしたものです。左上から金属原子を中心に含むシリコンケージのナノクラスターがビーム中で形成される様子とともに、左下には金属シリコンナノクラスターを規則的に配列させた集積膜の形成を描いています。金属原子を有機分子でサンドイッチしたナノクラスターなども気相相成できますので、これらを選択的に蒸着した基板は、機能性薄膜として触媒作用や光電変換における電荷分離などへの利用が期待されています。

(理工学部化学科 教授/KiPAS 主任研究員 中嶋 敦)

慶應義塾大学理工学部のウェブサイトは <http://www.st.keio.ac.jp/> です。

「3つの目」

理工学部長 伊藤 公平



青山藤詞郎前学部長が今年（2017年）3月末に慶應義塾大学を定年退職され、私が4月1日より理工学部長・理工学研究科委員長を務めることになりました。青山先生は7年9ヶ月に渡り、学部長として理工学部の発展を先導し、2014年には理工学部75年事業を大成功に導かれました。その青山先生は、退職されたのも束の間、5月28日に発足した長谷山彰塾長体制において、請われて教育・研究主幹の慶應義塾常任理事に就任され、理工学部矢上キャンパスも担当されることになりました。そして、理工学部の岩波敦子教授の常任理事重任も決まりました。慶應義塾全体の発展に向けて大変に心強く喜ばしいことです。一方、清家篤前塾長のもとで8年に渡り常任理事を務められました真壁利明先生が、任期満了に伴い退職されました。真壁先生は前々理工学部長でもあられ、理工学部そして慶應義塾の発展に多大な貢献をされました。これまでの真壁先生のご尽力と功績に理工学部一同、心より感謝しております。

さて、出典は不明なのですが、皆様は「虫の目、鳥の目、魚の目」という3つの目の使い方をご存知でしょうか？以下で述べるとおり、理工学部生の学習、そして、理工学部での研究において、3つの目がとても大切だと私は考えています。

虫の目は、専門を深く掘り下げる目です。理工学部生として、数学・物理・化学・生物・プログラミング・実験技術といった専門性を徹底的に高め、それらを駆使して特定の研究開発をとことん深堀りする鋭い目です。学部1年生のころは反復練習が多く、どうしてそのような苦しい思いをしなければいけないの？と思うことも多いでしょう。しかし学年が進み、研究や開発の要素が増えるにつれて寝食を忘れて、無我夢中に1つのことに取り組む喜びを覚え始めます。研究者になると、自分の好奇心や興味に任せて、周りの目を気にせず、1つの研究に徹底的に取り組むことがあります。その実力を涵養するのが虫の目です。

鳥の目は、高い位置から全体像を俯瞰して、どのようなテーマを深堀りするべきかを判断する目です。複数の全く

異なるテーマや仲間を集めて、新しい課題やチームを作るといった融合を育む目でもあります。理工学部では、専門に加えて、英語・諸外国語・総合教育科目に関する科目を多数揃えています。また、理工学部1・2年生が学ぶ日吉キャンパスでは、他学部、教養研究センター、外国語教育研究センター、体育研究所などが設置する様々な非理系科目が履修できます。総合大学だからこそその機会を活かして、様々な知識を吸収しながら、それらを体系立てて整理する実力をつける。そこから自分が取り組むべき課題を見出すために必要なのが鳥の目です。

魚の目は、流れを判断する目です。虫の目や鳥の目で見るスナップショット、すなわち静的な写真とは異なり、動的な流れを見極める目です。教室や課外活動で出会う様々な友人や教員との交流。アルバイトやボランティア活動を通じて接する先輩・後輩・仲間たちとの交流。旅行先や出張先での出会いで学ぶ新しい考え方とその動き。つまり、人間が形成する社会と、その生活の場である地球環境の変化といった流れを見極めるのが魚の目です。社会の基本要素が人と人とのつながりであり、そのダイナミズムが社会の変化ですから、上手な人づき合いをとおして流れを見る目を鍛える必要があります。リーダーの目です。

今、日本の大学における理工系教育は転換期にあります。世界では、ハードウェアとソフトウェアを一体化させた電子情報産業が自動車にまで進出し、ビッグデータ・人工知能ブームの波にのって、国籍を問わずに優秀な技術者を囲い込む競争が激化しています。化学・材料・創薬や医療工学においても、古典的な知識や技術に加えて情報の役割や社会とのつながりが強まる一方です。私たち理工学部教職員は、高度な専門性（虫の目）、豊かな教養と俯瞰力（鳥の目）と、世界レベルで社会の流れを読む力（魚の目）を持ち備えた卒業生を世に送り出すカリキュラム改革と、3つの目を持ち備えた専門集団による最先端理工学研究の実施を進めていきます。

教育と研究の融合

常任理事 青山 藤詞郎



3月末をもって慶應義塾大学を定年退職となり、伊藤公平次期学部長から花束を受け取り、大勢の教職員の皆様と研究室の学生諸君に見送られて矢上キャンパスを去ったことがいまでも人生における感動の一ページとして思い出されます。それから2か月足らずで、再び、慶應義塾に常任理事として奉職することとなりました。微力ながら、義塾の発展のために尽力できることをとても嬉しく思っております。また、理工学部長在任中に、皆さまから賜りました、ご指導、ご支援に、重ねて厚く御礼申し上げます。

高等教育機関としての大学・大学院の主な使命は、学生諸君に高度な教育を施すことにより、将来を担う優秀な人材を育成し世に送り出すことによって、社会貢献を果たすことにあります。そして、卒業生・修了生が社会で如何に活躍するかによって、母校としての大学・大学院が評価されます。大学の教育プログラムには、講義、実験・実技、研究室、インターンシップなど様々な形態があり、その内容は多岐にわたっています。慶應義塾大学理工学部・理工学研究科の場合、卒業研究や修士・博士論文研究の場で、塾生が指導教員や先輩とともに、半学半教の精神のもとに様々な研究を行っています。ここで、教員が自ら行う研究を通して得た経験や成果が教育に生かされることはもとより、研究室において教員と塾生が協働して行う研究活動をとおして、優れた人材が育ちます。まさに、「教育」と「研究」の2つの活動は、別々なものではなく、人材育成における車の両輪の機能を果たしています。大学が持つ様々なリソースを、教育活動と研究活動の両面に、選択的かつ集中して活用し、必要な改革を行いながら、より高度な人材育成の達成に向かって如何に駒を進めることができるかが重要な課題です。

慶應義塾は、国の施策である、「博士課程教育リーディングプログラム（オールラウンド型・複合領域型）」「研究大学強化促進事業」「スーパーグローバル大学創成支援事業」などに採択され、世界をリードできる優れた人材を育てるために、教育と研究の両面から新たな取り組みを進めており、理工学部・理工学研究科は、その牽引役として大きな貢献を果たしています。その一例として、欧州の有名大学との提携によるダブルディグリープログラムは、長年にわたる努力により、他に追従を許さない実績を挙げています。また、フランス・グルノーブル市のフランス原子力・代替エネルギー庁（Commissariat à l'énergie atomique et aux énergies alternatives (CEA)）および国際的研究機関である国立科学研究センター（Centre National de la Recherche Scientifique (CNRS)）との間で、国際連携協定を締結し、若手・中堅教員や博士課程学生の研究交流が開始されています。

我が国の大学の国際化対応の遅れが問題視されているなか、慶應義塾が世界トップレベルの教育研究機関として世に貢献するために、新たな国際教育プログラムの開発や国際的な研究連携の推進により、優秀な留学生の確保、塾生の国外留学や国外研究活動の活性化、国際共同研究の推進などが重要な課題となっており、これらの活動を支援するためのソフトとハードの両面からの改革が望まれています。その実現のためには、新たな制度や規程を設けるのみではほとんど実効がありません。関係する現場の教職員や塾生諸君の意見にしっかりと耳を傾け、協調することによって可能なことから実行する必要があります。

この度、教育（主管）、研究（主管）、国際（共管）、財務（共管）、矢上キャンパス、芝共立キャンパスを担当することになりました。教育と研究の連携をとり、世界トップレベルの教育研究機関として慶應義塾の社会貢献を推進するため、法人として教学部門の活動を積極的に支援してまいります。

引き続きの、ご指導、ご支援、ご協力を賜りますよう、お願い申し上げます。

学生への支援で見る理工学部国際交流事業

国際交流委員会委員長 小尾 晋之介



一昨年、2015年9月20日発行の理工学部報第64号に「国際プログラムと学生気質」と題して、慶應理工学部生の在学中の留学（海外活動）に対する意識調査の結果をご紹介しました。留学の障害となる理由として「経済的負担が大きいから」、「語学力が不足しているから」、「留学する目的が定まらないから」という回答が多数を占めました。このような障害をひとつひとつ軽減し、より多くの理工学部生が在学中に海外活動の経験を積むことができるように、理工学部では学生への経済支援を様々な形で行ってきました。

理工学部の前身である藤原工業大学を設立した藤原銀次郎先生のご子息、藤原有三氏のご寄付により「藤原奨学基金」が設立されて今年で20年を迎えました。日本で学ぶ留学生への経済支援がその主たる目的で、現在も博士課程に学ぶ留学生3名に対して授業料相当の奨学金と年間の生活費を支給しています。また、学生の範となる活動を表彰する「藤原賞」の設立や大学院生への奨学事業、理工学部生の海外活動支援なども併せて行われ、昨年度までの累計で支援を受けた学生数は700名を超えています。

一方、理工学部創立75年記念事業の一環で設立された「国際人材育成基金」と、相前後して設立された「国際人材育成資金」¹により、理工学部生の海外活動への支援は大きく加速しました。図1に2008年度からの支給総額の変遷を示します。2008年度から2014年度までは「藤原奨学基金」の一部がダブルディグリープログラムの参加学生の支援に充てられてきましたが、2012年度にその一部は「国際人材育成資金」に引き継がれました。「基金」の本格運用が開始された2015年度からは、ダブルディグリーに加えて理工学部が主催する海外研修や大学国際センター主催による交換留学生などへと支援の対象を広げることができました。

これら、理工学部独自の「国際人材育成資金」と「国際人材育成基金」からは、春期と秋期の2回に分けて、海外活動を終えて帰国した学生からの申請に基づいて奨励金が支給される仕組みです。2015年度から2017年度春期までの間に学生から申請のあった海外活動は253件ありました。その内訳を、

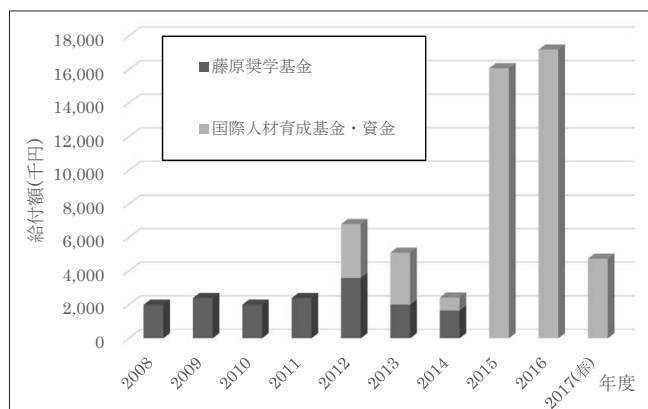


図1 理工学部生の海外活動への経済的支援の変遷

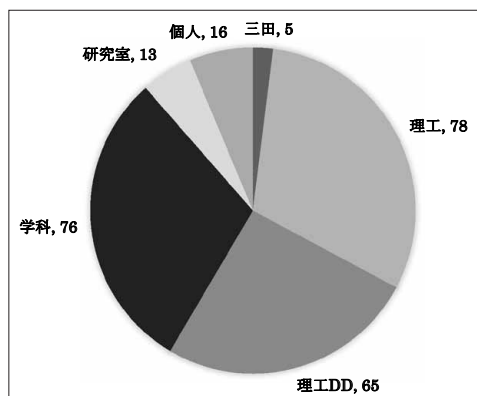


図2 国際人材育成基金・同資金による理工学部生の海外活動支援対象者数の主催者別内訳 (2015年度～2017年度春期)

プログラムの開催主体別に数えた結果を図2に示します。図中、「三田」は大学国際センター主催の在外研修と交換留学、「理工」は理工学部が主催する夏休みや春休みの研修や研究研修など、「理工DD」はダブルディグリープログラム、「学科」および「研究室」は理工学部の学科や研究室によるもの、「個人」は語学研修や海外インターンシップなど学生個人が主体的に行った活動で、それぞれ申請数とともに示しています。学生の申請書に記された活動内容や期間を基準に審査され、学生一人当たりの支給額は概ね30万円から数万円程度まで様々です。申請件数は年々大幅に増加していて、学部内で海外活動への関心は高まっているといえます。

このように、理工学部創立75年記念事業を機に、理工学部生の海外活動への経済的な支援制度が充実してきました。2017年度秋期については夏休みの海外活動を終えて帰国する学生からの申請を受け付けますので、その分が図1、図2のグラフに加わります。昨年以上に多くの申請が集まることが期待されています。

¹ 「国際人材育成基金」および「同資金」への募金は指定寄付の形で常に行っていますのでご支援をお考えの方は担当までご連絡ください。

オールラウンド型リーディングプログラム 「超成熟社会発展のサイエンス」

プログラムコーディネーター／総合デザイン工学専攻 教授 神成 文彦



経済や社会制度が十分に発展し、必要な物やサービスが十分に満たされ自由で便利な生活を送れる一方で、価値観が人々の間で多様化している「成熟社会」では、さらなる社会発展の見通しが極めて不透明であります。さらに、我が国では経験したことない少子高齢化、人口減少の波が迫り来る中で予測不可能な将来に不安を隠せない現実も存在しています。この「超成熟社会」の課題を打破しこれまでの延長線上にはない視点と方法論によって社会発展をめざすには、新しい視点で育てられた志の高い優秀な人財にゆだねる以外に解は存在しないと思われます。この視点に立脚し、博士人財に深い専門性に

加えて総合力と俯瞰力、グローバルな視点と行動力を植え付け、彼らにこれからの産業界をはじめとした新しい社会システムを牽引してもらおうという目的で文科省の支援のもと（全国で63プログラム、うちオールラウンド型は7件）、2011年から始めた博士課程教育リーディングプログラムの理念と実績は、これまでの博士課程教育に大きな変革をもたらしつつあります。2017年4月現在、2期生から6期生までの48名がプログラムに在籍し、その50%が理工学研究科の学生になり、全体で10研究科からの多様な学生がこの5年一貫プログラムに参加しています。

慶應義塾のオールラウンド型リーディングプログラムの最大の特徴は、イラストに示しましたように、最初の3年間で文系、理系に跨る2つの修士号を取得することで否が応でも2つの学問分野のアプローチを学ばせている点と、産業界から10名以上のメンターにご参加いただき、毎週土曜日の午後を学生、メンター、教員、時には外部の特別講師が一堂に会して、現在の社会が直面している課題の抽出とその解決に向けた学生個々の独創的なアイデアについて議論することで、生身の教育を実施する場を恒常的に設けている点にあります。2017年3月には理工学研究科の7名を含む9名が1期生としてプログラムを修了し、文系の1名を除いた8名が産業界、中央官庁に就職しました。特筆すべきは、副専攻で商学、経済学等の修士

課程を取得した理工学研究科修了の7名のうち、研究職に就職した学生は2名であり、3名がメーカーおよび商社のビジネス部門、2名が経産省、文科省を選び、プログラムで培った総合力を活かした新しい博士人財のキャリアパスに挑戦し始めている点にあります。学生にとっては、本プログラムからの経済的支援のみならず、国際インターンシップや短期国外留学を含む多彩な教育メニューにより、経験と自信、方法論、スキル育成の面で役に立ったものが多々あると思われますが、最も価値ある成果は「気づき」と「志しの高揚」であったに違いありません。本プログラムをはじめとした全国のプログラム修了生が産業界、官庁等で活躍し成果が認められるまでにはまだ時間がかかりますが、グローバルな舞台でリーダーシップを発揮できる新しい博士人財として職場でのさらなる研鑽を期待します。

高度博士人財育成教育の使命は今後も慶應義塾大学の中で継承されていくことになりますが、予想がつかない社会の变革時に優れた人財を社会に送り出す使命は、慶應義塾の目的そのものであり、塾内外のさらなるご理解とご支援をお願いいたします。

(ウェブサイト <http://plgs.keio.ac.jp/>)



文科省で開催した政策提言発表会での1期生の面々

グローバル環境システムリーダープログラム (GESL) が目指すもの



プログラムコーディネーター (理工担当) / 開放環境科学専攻 教授 植田 利久

本プログラムでは、技術的側面、社会的側面、地域的側面、多国間関係、地球規模スケールなど、多様で複雑な側面を有する環境問題の解決に貢献する博士人材の育成を目指しており、本プログラムを修了した博士人材には、大学などのアカデミックな場だけではなく、国際機関、政府、自治体、企業、NGO、NPO など実社会で環境問題に取り組んでいる場に広く進み、その力を発揮し、現実起こっている環境問題の解決に寄与することを期待しています。本プログラムは、科学技術的手法を専門とする理工学研究科と、社会科学的的手法を専門とする政策・メディア研究科 (湘南藤沢キャンパス) の2研究科で企画され、構築されてきました。

本プログラムには3本の柱があります。1本目の柱は国際産・学・NPO 連携研究指導体制です。学生は3名の指導教員から指導を受けます。理工学研究科の学生は、主専攻として、理工学研究科の指導教員から自らの専門について指導を受け、副専攻として政策・メディア研究科の教員の指導のもと、社会科学的な問題解決手法について学びます。さらに、海外の教員、研究者を指導教員として、国際的な視点、解決手法について学びます。2本目の柱は国際トレーニング制度です。学生は、修士、博士課程5年間の間に、6ヶ月以上インターンシップを行います。インターンシップ先は、University of Cambridge、Max-Planck-Institute、UNEP、Malaysia Solar Energy Research Institute、産総研など、国内外の大学、研究機関、国際機関、政府機関、自治体、企業などに広く展開されています。3本目の柱は遠隔コラボレーションシステムです。遠隔会議システムなどを用いて、矢上キャンパスと湘南藤沢キャンパスでの講義の同時開催や世界に展開している学生の活動に対する迅速な支援などを行っています。それぞれの学生は、この3つの柱を活用し、自らの専門を深め、将来計画を実現するために活発に活動しています。

本プログラムは、そのスタートから7年目を迎え、すでに6名 (内3名が理工学研究科) の本プログラム修了者を輩出し、それぞれつぎの道に進んでいます。その1名は、博士修了者にとってもっとも権威ある日本学術振興会育志賞を受賞しました。そして、現在、理工学研究科から33名、政策・メディア研究科から28名の学生が参加し、活動しています。この学生諸君が、将来、本プログラムを修了し、博士として様々な分野でそれぞれの持ち味を発揮し、協力しあいながら環境問題に取り組む姿を想像しています。この7年間で当初の目標を達成した面も多くありますが、反省点も多くあります。その反省点をふまえて、プログラムをさらによりよいものとし、環境分野で社会に貢献できる博士人材の育成をこれからも進めてまいりたいと考えています。今後とも、皆様方のご理解、ご指導、ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



グローバル環境システムリーダープログラム

学生支援について ～奨学金ならびに学生寮の現状と展望～

学生総合センター長 千田 憲孝



慶應義塾大学は「研究大学強化促進事業」（2013年より）ならびに「スーパーグローバル大学創成支援事業」（2014年より）に採択され、名実ともに世界を代表する研究・グローバル大学へと進化すべく、全塾をあげて注力しています。優れた学生・留学生を確保することが、真の研究・グローバル大学となるための第一歩となります。本稿では、塾ならびに理工学部・理工学研究科の「学生支援」のうち、奨学金制度と学生寮について概説します。

優秀な学生を経済的に支援するため、多くの奨学金制度が運用されています。国が実施している日本学生支援機構の貸与奨学金制度や民間財団からの奨学金に加え、塾独自の制度として100種を超える学内奨学金が用意されています。これら学内奨学金はすべて給費であり、学部生対象の慶應義塾大学給費奨学金（50万円、理工学部受給者は45名）（金額は1年あたり、人数は2016年度のもの）、大学院生対象の慶應義塾大学大学院奨学金（50万円、理工学研究科受給者69名）、小泉基金大学院特別奨学金（36万円、理工学研究科受給者11名）などが代表的なものです。この他に地方出身者、海外学習、家計困窮・急変者など、さまざまな学生を対象とした支援を行っています。2016年に大学院生用に新設された「研究のすゝめ奨学金」は、理工学研究科では博士課程学生への支援と位置づけ、博士課程学生65名に50～70万円を給付しました。理工学部・理工学研究科独自の奨学金制度の整備も進んでいます。藤原奨学基金大学院奨学金（博士課程学生、71～100万円、17名）をはじめとして、慶応工学会育英奨学金（博士課程、70万円、3名）、田村淳記念大学院特別奨学金（博士課程、45～60万円、4名）、パキット奨学基金（修士課程、30万円、6名）、理工学部同窓会奨学金（学部生、60万円、10名）、国際人材育成資金・基金海外留学奨励金（学部生・大学院生、最大40万円、121名）など、多くの支援が用意されています。また2017年には博士課程学生を対象とした天野工業技術研究所奨学金（100万円、最大6名を予定）が新設されました。しかし、学部生ならびに修士課程学生への支援は、学生数を考えるとまだ十分とは言えません。今後も新規奨学金の設立、既存の奨学金の増額などを検討していく必要があります。

地方出身者や留学生にとって、「住環境」は、研究・勉学に集中する上で、また大学を選ぶ際の重要なファクターとなります。近年、塾はスーパーグローバル大学創成支援事業などにより、留学生と日本人学生が入居する「混住型学生宿舎」の整備に力をいれており¹、この3月に矢上キャンパスより徒歩10分の場所に「日吉国際学生寮」が完成しました。100名の日本人学生と100名の留学生が入居する予定です。また2018年春には綱島のパナソニック工場跡地に綱島 SST 国際学生寮（仮称、混住型、163名収容）が、また中原区木月に元住吉国際学生寮（仮称、混住型、156名収容）が竣工予定となっています。既存の日吉寄宿舎、下田学生寮、大森学生寮、Plum Is（幸区矢上）、綱島学生寮、元住吉宿舎、大倉山ドミトリーと合わせると、2018年度は、学生寮全10棟・総収容人数1,524名（うち留学生用約630名）となります。学生寮の収容人数は着実に増加していますが、より多くの地方出身学生・留学生を迎え入れるためには、住環境のさらなる整備が不可欠です。

研究・グローバル大学への発展のためには、「学生支援」の充実がきわめて重要です。学生たちが研究・勉学に専念できる環境を整えるため、皆様のご協力をお願いする次第です。

¹ 塾の学生寮の現状と今後の展望などについては「三田評論」2017年4月号に特集記事が掲載されています。

教育への新しい風

垣村 尚徳 (准教授)：数理科学科／基礎理工学専攻 数理科学専修
専門：数理最適化、アルゴリズム

2017年4月より数理科学科に着任いたしました。専門は数理最適化の理論と応用で、おもに、グラフなど離散構造の上での最適化アルゴリズムの設計に取り組んでいます。赴任して2ヶ月が経ちましたが、数理科学科の先生方や職員の方々のあたたかいサポートのおかげで、新しい環境で充実した日々を送っております。

今学期は一年生の数学と大学院講義を担当しています。講義後に質問に来る熱心な学生が多く、中には鋭い質問もあり気が抜けません。学生に数理のおもしろさを伝えるためにはどのようにすればよいか日々考えながら授業をしています。

これからは自分の研究室を持ち研究指導をすることになります。私自身は工学系の出身ですので、最適化をはじめとして、社会で役に立つ数理科学の考え方を学生に学んでもらいたいと考えています。研究・教育を通じて、本塾の人材育成に貢献できるように努力していききたいと思います。



蛭田 勇樹 (専任講師)：応用化学科／総合デザイン工学専攻 マテリアルデザイン科学専修
専門：化学センサー、機能性材料、診断技術

2013年3月に本塾で博士学位取得後に、本塾薬学部で助教として4年間（2013年4月～2017年3月）の勤務を経て、今年4月より応用化学科に専任講師として着任致しました。薬学部は理工学部とはまったく異なる雰囲気、文化を持ち、研究においても臨床に近い研究をされている研究室も多かったため、新たな知見を広げることができました。

私の専門は分析化学ですが、ただ分析しているわけではありません。新しい機能を持った有機・無機材料の設計・合成を行い、それらを用いて化学センサー、医療診断技術などの開発を行っています。医療分野の応用には、化学だけでなく、医学、薬学といった分野との共同研究が必要になってきます。薬学部で培った人脈を活かし学部を超え、慶應義塾の総合大学としての強みを活かし、研究・教育を推進していきたいと考えています。



杉山 有紀子 (助教)：外国語・総合教育教室 ドイツ語担当
専門：近現代オーストリア文学、オーストリア文化史

2012年より3年間オーストリアのザルツブルクに留学、博士号取得の後、本年度より助教として着任しました。専門は20世紀前半を中心としたドイツ語文学研究で、特にナチス時代の亡命作家や、戦間期～戦後のオーストリアにおける国民アイデンティティと文化・文学の問題に関心を持っています。

初級から3年生まで、それぞれ違った段階の語学を担当していますが、もともと文学畑の人間でもあり、教えることで私自身も今更ながらドイツ語の原理を再認識させられることもしばしばです。同時にドイツ語圏の興味深いトピックや、日本のメディアでは見えにくい実態などもアクチュアルに伝え、一人でも多くの学生がヨーロッパそして世界へと視野を広げ、飛び立っていってくれればと願っています。まだまだ経験の浅い身ではありますが、日々向き合う彼らこそ師と思って今後も努力していききたいと思います。



機械工学科の近況

機械工学科主任 泰岡 顕治



本年3月に徐東郁助教（有期）が退職され、4月より岡野邦彦教授（有期）、倉科佑太助教（有期）が着任されました。また、大村亮准教授、大宮正毅准教授、三木則尚准教授が教授に、石上玄也専任講師が准教授に昇格されました。岡野教授には、企業と協働する新たな実習科目の立ち上げにご尽力いただいております。

本年2月には2年生14名が韓国ソウル近郊にて、11名がタイバンコク近郊にて工場見学を行い、それぞれ延世大学（韓国）とカセサート大学（タイ）の学生と交流しました。また、釜山国立大学（韓国）の学生を慶應に迎えた国内3社の工場見学も行いました。いずれも学生同士の交流を通して、互いに多くの刺激を受けました。本年度（2018年2月）も韓国釜山近郊、タイバンコク近郊での工場見学と学生交流を企画しています。また、9月には機械系修士課程の学生向けに、シンガポールおよび韓国での研究交流も企画しています。こうした機会を通してグローバルな視点で活躍できる人材育成を目指しています。（機械工学科ウェブサイト <http://www.mech.keio.ac.jp/>）

応用化学科の近況

応用化学科主任 藤本 啓二



本年度から学習指導副主任の藤原忍教授と教室幹事の奥田知明准教授とともに学科運営にあたっております。今年3月に鈴木孝治教授と吉井一記助教（有期）が退職され、4月には高尾賢一准教授（有機合成化学）と清水史郎准教授（生物化学）が教授へ、福井有香助教（高分子化学）が専任講師へそれぞれ昇格されました。また、蛭田勇樹専任講師（分析化学、本塾薬学部より）と芹澤信幸助教（有期）（電気化学、（財）電力中央研究所より）が着任されました。このような新しい体制で頑張っております。

さて、将来にわたって豊かで安寧な社会を実現するためには、自然との調和とともに人間生活に密着した「ものづくり」を行うことが求められています。昨年12月にはKEIO TECHNO-MALL2016（東京国際フォーラム）において、犀川陽子准教授を中心に、「健康」と「美」にコミットする応用化学の分子、マテリアル、システムデザイン研究と題して、グループ展示とミニプレゼンテーションが行われました。応用化学の魅力をおおいに発信することができたと思います。本年度も引き続き、応用化学という学問を起点として社会にインパクトを与えていきたいと考えております。

学生達と教職員が一丸となって、応用化学科をしっかりと引き継ぎ、ますます魅力ある学科とし、次へとつないでいく覚悟でございます。卒業生の皆様からのご支援をよろしくお願いいたします。（応用化学科ウェブサイト <http://www.applc.keio.ac.jp/>）

電子工学科の近況

電子工学科主任 斎木 敏治



電子工学科では昨年12月に高橋綱己助教（有期）が退職され、今年4月には秋月秀一助教（有期）が新たに着任されました。また、湯川准教授が福澤諭吉記念慶應義塾学事振興基金によるベルリン工科大学での留学期間を終え、3月に帰国されました。若手教員にこのような機会を与えていただいた理工学部の暖かいサポートに厚くお礼申し上げます。

昨今の電気電子業界の激しい動向変化には驚かされるばかりです。このような状況を見るにつけ、みなが大きな船に身を委ねるのではなく、各個人が自身の価値観をしっかりと持ち、小さな船であっても目指す方向に力強く漕ぐことが大切だと感じます。電子工学科で学んだ学生であれば誰でも、勇気と信念をもって大海に出られるような教育をしたいと考えております。

昨年度よりOB・OGの方を講師としてお招きする談話会を学科としてスタートしました。ご縁がありました折には、現任教員への熱いメッセージを賜りたく存じます。（電子工学科ウェブサイト <http://www.elec.keio.ac.jp/>）

物理情報工学科の近況

物理情報工学科主任 田中 敏幸



学科主任の2年目を務めさせていただいております。4月には、二瓶栄輔専任講師が准教授へ昇格、井上正樹助教（有期）が専任の助教として任用されました。今年度は、教室幹事を二瓶栄輔准教授、学習指導副主任を内山孝憲教授として、教員25名で教育および研究に取り組んでまいります。

グローバルな視点で活躍できる人材が社会的に求められているなか、物理情報工学科では学生が自主的に国際的な素養を身につけられるようにカリキュラムの工夫をしています。2年生科目の一部と3年の全ての科目群を4学期制に対応させることにより、第1学期末試験終了後に、海外の大学のサマーセッションや海外インターンシップに参加することが可能になっています。また、各研究室では国内外での発表を視野に入れた先端的な研究を行っており、その活発な研究成果は学科ウェブサイトで紹介しております。今後も卒業生の皆様からのご支援をよろしくお願い致します。

（物理情報工学科ウェブサイト <http://www.appi.keio.ac.jp/>）

管理工学科の近況

管理工学科主任 枇々木 規雄



栗田治教授の後任として、2017年度から学科主任を務めることになりました。教室幹事の志田敬介准教授、学習指導副主任の今井潤一教授とともに、活力ある学科運営を行います。

人事報告ですが、篠沢佳久先生（情報）が准教授に昇格しました。また、長年学科のために尽力されました高橋正子教授（経営管理）が3月末に退職されました。

世の中では、ビッグデータ解析、AI、IoT、FinTech、など社会に大きなインパクトを与える技術革新への期待が高まっており、本学科の果たすべき役割も大きくなると考えています。本年度も教員一同（22名）が協力して学科教育に当たるとともに、社会に役立つ研究成果の創出を目指します。2019年に迎える設立60周年に向けて専門教育をさらに充実させるべく、カリキュラムなどを見直す準備も始めました。教育・研究に関するご助言・ご提案がございましたら、お知らせください。卒業生の皆様には、今後も管理工学科のためにご協力いただければありがたく存じます。

（管理工学科ウェブサイト <http://www.ae.keio.ac.jp/>）

数理科学科の近況

数理科学科主任 田村 明久



学科主任4年目に入りました田村明久です。今年度は教室幹事の林賢一専任講師、学習指導副主任の坂川博宣准教授とともに学科運営にあたります。

今年3月に野寺隆教授が定年退職され、4月より垣村尚徳准教授が着任しました。井口達雄教授が4月より約1年間フランスのボルドー大学に塾派遣留学をしています。

昨年度も紹介しました数理コモンルームの整備がひと段落しました。教職員、学生が自由に議論をしたり、セミナーをしたり、数理科学科らしい部屋となりました。14棟6階南側に面し、夏は花火、冬は雪を被った富士山を望むことができます。矢上にお越しの際は数理コモンルームにもお立ち寄りください。

社会からは数学と統計学の両方を身につけた人材が求められています。このために2年次科目と3年次科目の見直し作業をしてきましたがそれも終わり、来年度の2年生から新カリキュラムの実施が始まります。今後も学生の住環境・教育環境の改善、研究活性化および教員の研究時間の充実を目指していきます。

（数理科学科ウェブサイト <http://www.math.keio.ac.jp/>）

物理学科の近況

物理学科主任 江藤 幹雄



物理学科では、4月に齊藤圭司准教授（統計力学）が教授に、山本直希専任講師（原子核・ハドロン物理学）が准教授に昇格しました。スタッフは総勢23名（うち1名はKiPAS研究員）で、皆全力で教育、研究に取り組んでいます。

その齊藤圭司教授ですが、「熱が関わる非平衡輸送現象における基礎的研究」が評価されて、昨年、第20回久保亮五記念賞を受賞しました。これは統計力学の分野で多大な功績を残された久保亮五先生を記念して作られた賞です。久保亮五先生は、物理学科創設当時の教授でもあります。スタッフの1名が、慶應にゆかりのある栄誉ある賞をいただいたことは、たいへん喜ばしいことです。

物理学は自然科学の基礎となる学問です。人工知能、車の自動運転、モノのインターネット（IoT）など多様な技術革新が進行する現在、基礎力をしっかり身に付けた学生が求められています。このような社会で活躍する人材の育成を目指します。（物理学科ウェブサイト <http://www.phys.keio.ac.jp/>）

化学科の近況

化学科主任 垣内 史敏



本年4月に河内卓彌専任講師（有機金属化学）が准教授に、岩崎有紘助教（有機）が専任の助教に昇任されました。6月に井貫晋輔助教が退職されましたが、本年10月より香港中文大学化学科を退職された Tony Kung Ming Shing 教授が教授（有機）として着任される予定です。

化学分野はグローバル化が益々進んでおり、国際的に活躍できる研究者の育成が強く望まれています。このようなことから、英国マンチェスター大学と香港中文大学で教育経験をもつ Shing 教授に、学部生ならびに大学院生に対しての授業を担当していただく予定です。新しい取り組みにより、グローバルな視点を持ち、世界で活躍できる逞しい学生の育成を目指します。また、昨年と同様、博士課程への進学者も多く、高い専門性と広い知識を持つ研究者の育成も順調に進んでいます。今後もさらなる発展のために様々なことに挑戦する化学科を目指します。皆様からの変わらぬご支援をお願いいたします。（化学科ウェブサイト <http://www.chem.keio.ac.jp/>）

システムデザイン工学科の近況

システムデザイン工学科主任 伊香賀 俊治



システムデザイン工学科は、2017年4月に学科創設22年目を迎えました。機械工学科、電気工学科、計測工学科に籍を置く有志教員24名で、“ものづくりに携わる人材”、“ものづくりを目指す組織をリードする人材”を育成する新たな教育・研究体系を確立すべく創設され、その後、建築と航空宇宙の領域を拡張し、現在、教授15名、准教授10名、専任講師1名、助教2名の合計28名の体制となっています。当学科出身の教員も6名（准教授4名、助教2名）に増え、時間的・空間的に複合したダイナミクスを解析し、制約条件や評価規範も含めてモデル化し、新しい価値を創出し、技術者も芸術家と同じように、真っ白いキャンバスに、「モデル化」という筆を用いて、「システム」という絵を描く、創造活動ができる優秀な人材を社会に輩出し続けるべく取り組んでおりますので、今後とも皆さまのご支援をよろしくお願いいたします。

(システムデザイン工学科ウェブサイト <http://www.sd.keio.ac.jp/>)

情報工学科の近況

情報工学科主任 寺岡 文男



昨年度、学科主任であった天野英晴教授が開放環境科学専攻長に就任されたのを受け、寺岡が学科主任を仰せつかりました。昨年度から今年度にかけて新任や退職などの構成員の変更はありません。今年度は教室幹事の髙田眞吾教授、学習指導副主任の今井倫太教授という布陣で学科運営にあたっております。

情報を有機的に効率よく交換するための情報通信ネットワーク技術、未来を正しく理解し情報を把握して人間の役に立つように処理するメディア工学、さらにこれらの技術を基盤として支えるコンピュータ科学が情報工学科のコアとなります。これらの知識や技術を具備した優れた人材を育成することが情報工学科の目的であると考えております。この目的に向けて、昨年度からカリキュラム改定のための熱い議論を重ねております。新カリキュラムでは、3年生の第2クォータから夏休みにかけて海外への短期留学に行きやすいように工夫したいと思っております。

(情報工学科ウェブサイト <http://www.ics.keio.ac.jp/>)

生命情報学科の近況

生命情報学科主任 岡 浩太郎



役職者は佐藤智典教授が大学院学習指導副主任、宮本憲二教授が学部学習指導副主任、佐藤健吾専任講師が教室幹事を担当し、学科の運営にあたっています。人事に関しては、宮本憲二先生と土居信英先生が教授へ、また川上了史先生と藤原慶先生が専任講師（有期）に昇格されました。

現在理工学部3年生に短期留学などのチャンスを作るために、4学期制の導入が各学科で進められています。生命情報学科でも3年次の生命情報実験を生命情報実験A～Dの4つに分け、B実験を3年で履修しなくても4年生に進級できるようにしました。また学科専門課目を4学期制に対応させる（週2回講義を行う）ことについても検討しています。

研究面ではNature communications（榊原教授）や米国アカデミー紀要への2報の論文（松原専任講師・佐藤教授、堀田専任講師）など、トップジャーナルへの論文掲載が活発に行われています。

(生命情報学科ウェブサイト <http://www.bio.keio.ac.jp/>)

日吉の近況

日吉主任 萩原 眞一



日吉では今年3月、長らく理工学部のドイツ語教育および本塾大学とアーヘン工科大学との国際交流の発展にご尽力くださった森泉先生が定年退職されました。同年4月、森君の後任として杉山有紀子助教が新たに着任すると共に、ディル、ジョナサン専任講師（英語）が准教授に昇格しました。また岩波敦子教授（ドイツ語）が5月、常任理事（重任）に就任し、引き続き本塾全体を牽引する重要な役割を担われています。

学事面では、理工学部が1996年度より独自に設置している総合教育科目のあり方を再検討した結果、2017年度入学者より、10単位以上取得すべき日吉設置総合教育科目のうち、人文・社会・学際系の科目の単位を4単位以上取得することを卒業条件としました。この他にも、新たに履修申告単位の上限を年間54単位に設定したり、GPA制度も導入されました。日吉における教育システムは、今年度、大きく変わりつつあります。

入試制度のご紹介

基礎理工学専攻長
高野 宏



2017年4月1日現在、基礎理工学専攻には前期博士(修士)課程に459名、後期博士課程に86名の学生が在籍しています。前期博士(修士)課程の学生の多くは、6月入学試験・8月入学試験を受験して入学します。6月入学試験を受験せずに、8月入学試験だけを受験することもできます。

6月入学試験では、書類審査の結果、合格者、口述試問を課された者、8月入学試験で合格が判定される者に分かれます。口述試問を課された者は、口述試問の結果、合格者と8月入学試験で合格が判定される者に分かれます。

8月入学試験では、記述試問と口述試問が行われ、合格が判定されます。2015年度より、記述試問では、出願時に選択した希望指導教員が所属する教育研究分野の試問を受験することになりました。教員の所属分野につきましては、

<http://www.gakuj.keio.ac.jp/academic/shingaku/rikou-faculty-list.pdf> をご覧ください。

異分野とのコミュニケーション

総合デザイン工学専攻長
岡田 英史



総合デザイン工学専攻では、2008年度から後期博士課程の1、2年生を主な対象とした研究進捗発表会を開催しています。総合デザイン工学専攻は、理工学部の11学科のうち6学科に所属する研究室で構成されていますので、発表内容は多岐に渡っています。共通分野の専門家が集まる研究会や国際会議における発表や議論には慣れている博士課程の大学院生でも、全く専門が異なる人を相手にすることは多くないようで、研究会などでは容易に通じる話が通じないことを、身を以て感じる機会になっているようです。専門の細分化が進む一方で、異分野との融合によって新たなイノベーションが創り出されている現在の科学技術において、専門分野の異なる人と互いの研究に関して良好なコミュニケーションをとれる人材が求められることは疑うべくもありません。研究進捗発表会が、博士課程の大学院生にとって、このような能力を養うことへの動機付けになればと考えています。

空間・環境デザインの教育と研究の展開

開放環境科学専攻
空間・環境デザイン
工学専修主任
小檜山 雅之



本専攻では今号より専修持ち回りで近況報告させていただきます。

当専修では大規模・複雑な空間・環境システムに対応したデザインの教育・研究を行っています。大きなニュースとしては、4月にアルマザン・カバジェーロ、ホルヘ君が専任講師から准教授に昇任いたしました。6月16日に「Architectural Design Research」と題して就任講演を行い、今後の研究の展望と熱意を語っています。

また、本年度より3年間、公益財団法人東京都都市づくり公社のご支援を受け、「サステナブル防災都市・建築学寄附講座」を開講いたします。災害復興まちづくりの経験豊かな紙田和代特任教授を迎え、秋学期に「都市・建築レジリエンス特論」の講義を行います。専修の主専門科目の一つとして、災害に強く環境と調和した都市・建築を創造する方法を実践的に学ぶ本科目を加え、ますます活発に教育・研究活動を展開してまいりたいと思っております。

慶應義塾先端科学技術研究センター (KLL) から産業界への技術発信

慶應義塾先端科学技術研究センター 所長 鈴木 哲也



慶應義塾先端科学技術研究センター(KLL)は2000年に設立し、今年で創立18年を迎えました。KLLでは理工学部の産学官連携の窓口として、国および企業からの受託・共同研究を管理・運営し、研究成果を社会還元することを目的としています。具体的には、企業との受託・共同研究はもちろんのこと、経済産業省や文部科学省等の国の事業も含め、年間約400件の研究プロジェクトを受け入れ、研究成果の実用化を支援しています。昨今、国の事業では、産学官で「出口イメージ」を共有し、イノベーション創出につながる研究を促進するための事業が増えており、大学にとって、研究成果に対する「社会への波及効果」が大きな評価の基準となっています。

KLLの重要な役割の一つであるリエゾン活動では、これまでは主に各教員の技術を単独の企業と結び付ける活動を実施してきました。しかし、それだけでは不十分で、産・学・官のそれぞれの強みを活かしたオープン・イノベーションへの期待が高まっています。そこで、KLLのリエゾン活動体制を見直し、2014年度から、新たに産学官連携コーディネーターを採用し、新体制のもと活動をスタートさせました。これまで点と点を結び付けてきたリエゾン活動に、複数教員と複数企業とを結び付けて理工学部の組織色を鮮明にしていく手法を取り入れることで時代の要請に応えられるよう努めています。

産学官連携の動きを活性化させるための取組みとして、地元地域(横浜・川崎)の中小企業との連携を支援するマッチングファンドの制度をKLLの指定研究プロジェクト制度のもとに新たに設けました。また、既存の指定研究プロジェクト-次世代先端分野探索研究も産学連携志向の高い若手研究者を重点的にサポートできるように制度改正を行いました。

最後に、2016年12月に開催したKEIO TECHNO-MALLでは2,068名の方にご来場いただき、過去最高の来場者数となりました。会期後には開催報告のHPを開設し、当日の会場で発表された出展者の技術シーズ資料や各イベントの動画を掲載する等、KEIO TECHNO-MALLの広報活動を精力的に行っています。

最近の就職状況について

理工学部 就職担当委員長 津田 裕之

1. 2017年3月卒業・修了者就職状況

2016年度は、経済状況の好転とともに学生の就職活動は概ね順調に推移しました。学部卒業生の20%が就職し、就職者の内訳は、理系就職が49%、文系就職が51%で、修士課程への進学率は76%でした。また、修士課程修了生の87%が就職し、理系就職が84%、文系就職が16%で、博士課程への進学率は8%でした。これらの傾向は例年どおりで、大きな変化は見られませんが、学部学生の修士課程への進学率が増加しました。また、就職した学生の中で学校推薦制度を利用した学生は学部学生の14%、修士学生の42%でした。次ページに就職先企業一覧を示します。なお、3月末時点での就職活動者は、学部学生が2名、修士学生が3名で、学部学生の在学期間延長制度利用者は3名でした。

2. 2018年3月卒業・修了者就職活動状況

理工系求人社数は6月時点で659社であり、その中で学校推薦を利用する会社数はほぼ前年並みの151社となっており、引き続き企業の採用意欲の高さが感じられます。

前年同様に採用選考は卒業／修了年度の6月開始となっていますが、3月以降ジョブマッチングと言われる配属希望部署での面接や、OB・OGリクレーターとの面談を通して、学生と企業がお互いに絞込みを進めています。6月現在、企業が学生に内々定を出し始め、就職活動の正念場を迎えています。

7月以降も内々定が得られない場合には、就職担当委員を中心に、学生の心が折れないように丁寧な就職支援を継続する予定です。9月には、その時点で採用を継続している企業と学生とのマッチングをとる就職活動継続者向け企業セミナー及び進路変更者向けセミナーを開催予定です。このような支援を行いつつ、9月中にはほぼ全員の進路が決まることを期待しています。

3. 2019年3月卒業・修了者向け就職支援と今後の展望

2019年3月卒業・修了予定者については、今年と同様に、学部3年あるいは修士1年の3月に採用広報活動開始、その3ヵ月後の6月に選考開始となります。この就職活動日程に合わせて就職支援を行っていく予定です。但し、「勉強と研究に励むことが最強の就活」であるとして焦らずに勉強に取り組むよう促し、進路については親族と本音の話し合いをするように伝えます。その後の、自己理解、業界研究、エントリーシート対策、面接対策、マナー講座等の実用系の講座についても、前年と同時期に開催予定です。企業のOB/OGを招いた就職セミナーは、OB/OGと学生がコンタクト出来る場として、今年は採用広報活動開始時期に合わせて3月に実施し多くの学生が参加しました。このような学生の動きを踏まえ、2019年3月卒業・修了者向けに行う来年のOB/OGによる企業研究セミナーは、従来の職種別セミナーと併せ、企業の広報活動が開始される3月上旬に集中させ、効率的な企業研究を進められるよう計画しています。公務員志望者対象のセミナーは、早くから試験対策が必要なこともあり、11月に行う予定です。また、学校推薦制度もより多くの学生に有効に利用してもらおうべく各就職担当委員は数十社の人事担当者や面談し、企業側の求める人材や採用スケジュールなどの情報を得て、学生と企業との橋渡しを行います。理工学部・理工学研究科として、勉強と研究の時間を確保して学生の实力を高め、希望の進路に結びつくように学生に対する支援を引き続き行いたいと思います。

2016年度の就職状況

表 2016年9月と2017年3月卒業・修了者の2名以上就職した企業（学部・修士合計数）

就 職 先	計	就 職 先	計	就 職 先	計
キャノン	28(4)	清水建設	4(1)	アーサー・D・リトル	2
ソニー	17(3)	セイコーエプソン	4	アステラス製薬	2(1)
日産自動車	16(5)	大日本印刷	4	花王	2(1)
富士通	16(2)	大和証券	4	川崎重工業	2
トヨタ自動車	13	中部電力	4	キユーピー	2(1)
野村総合研究所	13(2)	電通	4	協和発酵キリン	2(2)
日立製作所	12(1)	東京海上日動火災保険	4(3)	クボタ	2
新日鉄住金ソリューションズ	11(3)	東京電力	4	国土交通省	2(1)
アクセンチュア	10(2)	東レ	4(1)	島津製作所	2(1)
エヌ・ティ・ティ・コミュニケーションズ	10(2)	ニコン	4	ジャパン マリユニテッド	2
エヌ・ティ・ティ・データ	10(3)	日揮	4	商船三井	2
日本電気	10(4)	日本経済新聞社	4(1)	住友商事	2(1)
本田技研工業	10	日本航空	4(1)	全日本空輸	2
I H I	9(1)	野村證券	4(1)	第一三共	2
パナソニック	9(1)	ブリヂストン	4(2)	ダイキン工業	2
K D D I	8(1)	三菱東京UFJ銀行	4(1)	中外製薬	2(1)
ソフトバンク	8(2)	明電舎	4	中外臨床研究センター	2
三菱電機	8	J F E スチール	3(1)	ディー・エヌ・エー	2
東海旅客鉄道	7(1)	P w C コンサルティング	3(1)	テレビ朝日	2(1)
日本放送協会	7(2)	T B S テレビ	3(1)	電気化学工業	2
日本アイ・ビー・エム	7(3)	アクサ生命保険	3	東京都	2(1)
東日本電信電話	7(2)	アルファシステムズ	3	東和薬品	2
ヤフー	7(1)	エヌ・ティ・ティ・コムウェア	3	日東紡	2
旭化成	6	カシオ計算機	3	日本郵船	2(1)
オリンパス	6(1)	キリン	3(1)	日本技術貿易	2
キーエンス	6(2)	小松製作所	3	日本ヒューレット・パッカード	2
新日鉄住金	6	サイバーエージェント	3	日本ユニシス	2
東京瓦斯	6(2)	新日鉄住金エンジニアリング	3	日本ロレアル	2(1)
豊田自動織機	6	大和総研	3	東日本旅客鉄道	2(1)
エヌ・ティ・ティ・ドコモ	5(2)	デロイトトーマツコンサルティング	3	日立建機	2
慶應義塾	5	日本銀行	3	ヒロセ電機	2
シンプレクス	5(1)	日本たばこ産業	3(1)	フジクラ	2
第一生命保険	5	日本電産エリシス	3(2)	みずほ情報総研	2
デンソー	5	任天堂	3	三井住友信託銀行	2(1)
日本電信電話	5	富士ゼロックス	3(2)	三井不動産リアルティ	2
富士フイルム	5(1)	三菱UFJ信託銀行	3	三菱瓦斯化学	2(1)
みずほフィナンシャルグループ	5(1)	三菱UFJモルガン・スタンレー証券	3(1)	三菱地所	2(1)
三井住友銀行	5	三菱商事	3	三菱総研DCS	2(1)
三菱ケミカル	5	楽天	3	三菱総合研究所	2(1)
三菱重工業	5	リクルートキャリア	3	リクルートホールディングス	2
リコー	5(3)	D M G 森精機	2	その他1名就職企業	246(41)
J X エネルギー	4(1)	J A L インフォテック	2(2)	合 計	844(144)
旭硝子	4	J F E エンジニアリング	2(1)		
味の素	4(1)	L I X I L	2		
アズビル	4	S B I B I T S	2		
沖電気工業	4	T O T O	2		

合計内訳：学部204名(50名)、修士640名(94名)
 卒修者数：学部1034名(193名)、修士739名(117名)
 ()は内数で女子

昨年との比較

上位6社：キャノン(昨年20名)、ソニー(同8名)、日産自動車(同9名)、富士通(同16名)、トヨタ自動車(同20名)、野村総合研究所(同21名)
 5名以上就職した企業への就職者数：349名、41.4% (昨年372名、42.5%)
 2名以上70.9%(昨年68.4%)
 公務員：8名(昨年16名) 中学高校教員：4名(昨年6名)

博士課程の進路

修了者と単位取得退学者：73名中、企業等への就職者22名 (IHJ、日立製作所、日立ハイテクサイエンス、日本マイクロソフト、ルネサスシステムデザイン、明電舎、ディー・エヌ・エー、旭化成、大鵬薬品工業、ワールドホールディングス、KDDI 研究所、ヤフー、日本ナショナル・インスツルメンツ、東京海上日動リスクコンサルティング、富士ソフト、竹中工務店、産業技術総合研究所、キーエンス、三菱電機、丸紅ほか)、在職ドクターの復職者11名、大学等 (大学や学術研究機

関の有期ポスト、学振特別研究員4名を含む) への就職者13名、就職活動中1名、帰国3名、国家公務員2名、中高教員1名、非常勤講師2名、その他12名、未報告6名

留学生の進路

学部卒業生(3名)
 母国に帰国1名、留学2名

修士修了者(47名)

日本にて就職13名、進学9名、その他2名
 母国にて就職7名、進学3名、その他7名
 その他6名

博士修了者と単位取得退学者(18名)

日本にて就職5名、就職活動中1名、その他6名
 母国にて就職4名、その他2名

受賞

- 藤本ゆかり「平成28年度長瀬研究振興賞」
受賞日：2016年4月22日
授賞者：公益財団法人 長瀬科学技術振興財団
- 奥田 知明「鉄鋼環境基金第7回助成研究成果表彰 鉄鋼技術賞」
受賞日：2016年8月25日
授賞者：公益財団法人 鉄鋼環境基金
- 足立 修一「平成28年産業応用部門 部門論文賞」
受賞日：2016年8月31日
授賞者：一般社団法人 電気学会産業応用部門
- 奥田 知明「井伊谷賞」
受賞日：2016年9月1日
授賞者：日本エアロゾル学会
- 奥田 知明「2016年度 日本エアロゾル学会計測賞」
受賞日：2016年9月1日
授賞者：日本エアロゾル学会
- 高橋 大介「平成28年度（第19回）日本糖質学会奨励賞」
受賞日：2016年9月1日
授賞者：日本糖質学会
- 河野 健二「2015年度基礎研究賞」
受賞日：2016年9月8日
授賞者：日本ソフトウェア科学会
- 角山 寛規「第9回分子科学会奨励賞」
受賞日：2016年9月13日
授賞者：分子科学会
- 田村 明久ほか「日本オペレーションズ・リサーチ学会論文賞」
受賞日：2016年9月15日
授賞者：公益社団法人 日本オペレーションズ・リサーチ学会
- 内山 孝憲「2016年度計測自動制御学会論文賞」
受賞日：2016年9月22日
授賞者：公益社団法人 計測自動制御学会
- 内山 孝憲「2016年度計測自動制御学会著述賞」
受賞日：2016年9月22日
授賞者：公益社団法人 計測自動制御学会
- 牛場 潤一「フロンティアサロン永瀬賞」
受賞日：2016年9月23日
授賞者：一般財団法人 フロンティアサロン財団
- 田口 良広「ATPC Young Scientist Award」
受賞日：2016年10月5日
授賞者：11th Asian Thermophysical Properties Conference
- 山田 秀「平成28年度工業標準化事業表彰・経済産業大臣表彰」
受賞日：2016年10月6日
授賞者：経済産業省
- 齊藤 圭司「第20回（2016年度）久保亮五記念賞」
受賞日：2016年10月8日
授賞者：公益財団法人 井上科学振興財団
- 柿沼 康弘ほか「日本機械学会生産加工・工作機械部門優秀講演論文表彰」
受賞日：2016年10月22日
授賞者：日本機械学会 生産加工・工作機械部門
- 横森 剛「日本機械学会熱工學部門一般表彰（貢献表彰）」
受賞日：2016年10月22日
授賞者：一般社団法人 日本機械学会熱工學部門
- 大西 公平「平成28年秋の紫綬褒章」
受賞日：2016年11月3日
授賞者：内閣府
- 杉浦 壽彦ほか「日本 AEM 学会技術賞」
受賞日：2016年11月25日
授賞者：日本 AEM 学会
- 岡野 真人「最優秀若手講演賞」
受賞日：2016年11月25日
授賞者：テラヘルツテクノロジフォーラム，福井大学遠赤外線域開発研究センター，日本分光学会テラヘルツ分光部会，応用物理学会テラヘルツ電磁波技術研究会，電子情報通信学会テラヘルツ応用システム時限研究専門委員会
- 江藤 幹雄「Outstanding Referee of APS Journals」
受賞日：2017年1月9日
授賞者：米国物理学会（American Physical Society）
- 岩崎 有紘「第33回井上研究奨励賞」
受賞日：2017年2月3日
授賞者：公益財団法人 井上科学振興財団
- 佐藤 隆章「第35回有機合成化学奨励賞」
受賞日：2017年2月16日
授賞者：公益社団法人 有機合成化学協会
- 高橋 大介「第35回有機合成化学奨励賞」
受賞日：2017年2月16日
授賞者：公益社団法人 有機合成化学協会
- 宮本 憲二「第1回イムラ・ジャパン賞」
受賞日：2017年2月24日
授賞者：イムラ・ジャパン株式会社
- 柿沼 康弘ほか「砥粒加工学会賞熊谷賞」
受賞日：2017年3月3日
授賞者：公益社団法人 砥粒加工学会
- 植田 利久「日本機械学会関東支部功績賞」
受賞日：2017年3月16日
授賞者：日本機械学会関東支部
- 岡野 真人「第11回日本物理学会若手奨励賞」
受賞日：2017年3月18日
授賞者：一般社団法人 日本物理学会
- 眞田 幸俊「電子情報通信学会フェロー」
受賞日：2017年3月24日
授賞者：一般社団法人 電子情報通信学会
- 久保 亮吾ほか「第32回テレコムシステム技術賞奨励賞」
受賞日：2017年3月24日
授賞者：公益財団法人 電気通信普及財団
- 蛭田 勇樹「平成29年度物理系薬学部奨励賞」
受賞日：2017年3月27日
授賞者：公益社団法人 日本薬学会物理系薬学部会
- 中嶋 敦「2016年度田中貴金属研究財団シルバー賞」
受賞日：2017年3月31日
授賞者：一般財団法人 田中貴金属研究財団
- 尾上 弘晃「平成29年度 科学技術分野の文部科学大臣表彰 若手科学者賞」
受賞日：2017年4月19日
授賞者：文部科学省
- 志澤 一之ほか「2016年度日本機械学会賞（論文）」
受賞日：2017年4月20日
授賞者：一般社団法人 日本機械学会
- 小池 綾・柿沼 康弘・青山藤詞郎・大西 公平
「2016年度日本機械学会賞（論文）」
受賞日：2017年4月20日
授賞者：一般社団法人 日本機械学会
- 桂 誠一郎「平成28年度船井学術賞」
受賞日：2017年4月22日
授賞者：公益財団法人 船井情報科学振興財団
- 松岡 由幸ほか「武藤栄次賞優秀設計賞」
受賞日：2017年5月20日
授賞者：公益社団法人 日本設計工学会
- 荒牧 国次「平成29年度 公益社団法人 腐食防食学会 学会賞」
受賞日：2017年5月25日
授賞者：公益社団法人 腐食防食学会
- 鵜飼 孝盛「2016年年間優秀論文賞」
受賞日：2017年5月26日
授賞者：公益社団法人 日本都市計画学会
- 桂 誠一郎ほか「第73回 電気学術振興賞 論文賞」
受賞日：2017年6月2日
授賞者：一般社団法人 電気学会
- 藤原 忍「第2回日本セラミックス協会フェロー」
受賞日：2017年6月2日
授賞者：公益社団法人 日本セラミックス協会
- 柿沼 康弘ほか「工作機械技術振興賞・奨励賞」
受賞日：2017年6月19日
授賞者：公益財団法人 工作機械技術振興財団
- 吉田 真明「第6回新化学技術研究奨励賞」
受賞日：2017年6月21日
授賞者：公益社団法人 新化学技術推進協会
- 川上 了史「日本蛋白質科学会若手奨励賞優秀賞」
受賞日：2017年6月21日
授賞者：一般社団法人 日本蛋白質科学会
- 久保 亮吾「安藤博記念学術奨励賞」
受賞日：2017年6月24日
授賞者：一般財団法人 安藤研究所
- 桂 誠一郎「平成29年度ひらめき☆ときめきサイエンス推進賞」
受賞日：2017年7月3日
授賞者：独立行政法人 日本学術振興会

新任

●教授

機 械 工 学 科 岡野 邦彦 (有期) 先端エネルギー／エネルギー技術評価／核融合 化 学 科 シン,
トニー クンミン (有期) 有機合成化学／キラル化合物／有機触媒

●准教授

数 理 科 学 科 垣村 尚徳 組合せ最適化／グラフアルゴリズム 大学院理工学研究科 (KIPAS) 山本 修司 (有期) スターク・新谷予想／多重ゼータ値

●専任講師

応 用 化 学 科 蛭田 勇樹 化学センサー／機能性材料／診断技術 生 命 情 報 学 科 藤原 慶 (有期) 人工細胞工学／合成生物学／分子生物学
生 命 情 報 学 科 川上 了史 (有期) 酵素／タンパク質／生体機能化学 大学院理工学研究科 (KIPAS) 猪谷 太輔 (有期) 凝縮系物理学理論／超伝導／超流動

●助教

外国語・総合教育教室 杉山有紀子 近現代オーストリア文学・文化／ユダヤ文学 応 用 化 学 科 芹澤 信幸 (有期) 電気化学／エネルギー変換・貯蔵／イオン液体
機 械 工 学 科 倉科 佑太 (有期) バイオメディカルマイクロデバイス／超音波／表面改質 物 理 情 報 工 学 科 井上 正樹 ロバースト制御理論／動的システムの安定論／スマートグリッド
電 子 工 学 科 秋月 秀一 (有期) 画像認識／ロボットビジョン／3次元物体認識 化 学 科 岩崎 有紘 天然物化学／構造決定／ケミカルバイオロジー

昇格

●教授

機 械 工 学 科 大宮 正毅 電子デバイス／界面／破壊力学／薄膜 応 用 化 学 科 清水 史郎 がん／分子標的治療／炎症／ケミカルバイオロジー
機 械 工 学 科 三木 則尚 MEMS／ヒューマンインターフェース／マイクロ・ナノ医療デバイス 物 理 学 科 齊藤 圭司 非平衡統計物理／輸送現象／量子ダイナミクス
機 械 工 学 科 大村 亮 クラスレート水和物／エネルギー技術／物理化学 生 命 情 報 学 科 土居 信英 進化分子工学／プロテオミクス／合成生物学
電 子 工 学 科 青木 義満 画像工学／画像計測／画像認識 生 命 情 報 学 科 宮本 憲二 生物機能化学／生物有機化学／タンパク質工学
応 用 化 学 科 高尾 賢一 有機合成化学／天然物の全合成

●准教授

外国語・総合教育教室 デル,
ジョアン 日本現代文学／村上春樹／心理学と文学 物 理 学 科 山本 直希 原子核理論／素粒子論／場の理論／多体系の理論
機 械 工 学 科 石上 玄也 フィールドロボティクス／宇宙探査工学／テラメカニクス 化 学 科 河内 卓彌 有機金属化学／有機合成／均一系触媒反応
電 子 工 学 科 久保 亮吾 システムエレクトロニクス／システム制御／光通信システム システムデザイン工学科 アルマザン
カ(ジェロ, ホルヘ) 建築設計・都市設計
物理情報工学科 二瓶 栄輔 高分子／屈折率分布／光線追跡 情 報 工 学 科 松谷 宏紀 計算機ネットワーク／計算機アーキテクチャ／ビッグデータ
管 理 工 学 科 篠沢 佳久 ソフトコンピューティング／パターン認識／ニューラルネットワーク

●専任講師

応 用 化 学 科 福井 有香 高分子化学／微粒子材料／バイオマテリアル

退職

●教授

	在職期間	専門	現職
外国語・総合教育教室 森 泉	1982/4/1～2017/3/31	ドイツ語学／語学教育／対照言語学／言語哲学	
応 用 化 学 科 鈴木 孝治	1982/4/1～2017/3/31	センシング材料／バイオ・ケミカルセンサー／医療・環境・食の計測 企業行動／環境経営／経営分析	JSR・慶應義塾大学医学化学イノベーションセンター研究部門長
管 理 工 学 科 高橋 正子	1979/4/1～2017/3/31	ハイパフォーマンスコンピューティング／疎行列計算技術／数式処理	慶應義塾大学非常勤講師
数 理 科 学 科 野寺 隆	1982/4/1～2017/3/31	工作機械／生産加工／工作機器	慶應義塾大学常任理事
システムデザイン工学科 青山藤詞郎	1979/4/1～2017/3/31		

●助教

機 械 工 学 科 徐 東郁 (有期)	2014/4/1～2017/3/31	分子シミュレーション／相変化現象／ナノ物理	
電 子 工 学 科 高橋 綱己 (有期)	2014/4/1～2016/12/31	CMOS デバイス物理／ナノ半導体熱物性／LSI の熱設計	九州大学大学院総合理工学府物質理工学専攻特任助教
応 用 化 学 科 吉井 一記 (有期)	2014/4/1～2017/3/31	電気化学／イオン液体／金属ナノ粒子／エネルギーデバイス	国立研究開発法人 産業技術総合研究所 エネルギー・環境領域電池技術研究部門 次世代蓄電池研究グループ 研究員

追悼

和田 旦先生

名誉教授和田旦先生が2017年3月17日に86歳で逝去されました。先生は1958年、本塾大学文学研究科英文学専攻修士課程修了と同時に工学部助手として着任され、爾来36年間英語教育・英文学研究に貢献されました。1983年からは5期10年日吉主任を務められま

した。小金井時代の経験を背景に矢上とのつながりは深く、日吉と矢上の交流にも尽力されました。先生の知的好奇心は芸術論、文学理論、言語論、都市論など広範な領域に及び、中でもご自身造詣の深い音楽との関連で、T.S.エリオットが晩年に到達した音楽形式に

よる詩の形態化に着目した研究は重要な論考とされています。1978年には日本翻訳文化賞を受賞されるなど翻訳の業績も多く、ご退職後は知的刺激に富んだエッセイや小説も書かれました。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

(名誉教授 森 泉)

矢上賞について



矢上賞 同窓会研究教育奨励基金による卒業生への表彰

同窓会研究教育奨励基金では理工学を原点として、これまでに社会的に顕著な活躍や、研究教育活動などをおして多大な社会的貢献を果たされている卒業生を奨励するため、矢上賞の表彰事業を行っています。

17回目となる今年度は、9月30日(土) 15時から、矢上キャンパス創想館において以下5名の方を表彰いたします。

水野 雄介 君(物理情報工学科 2005年卒 ライフイズテック株式会社 代表取締役 CEO)
 所 裕子 君(物理学科 1999年卒 筑波大学大学院数理物質科学研究科物性・分子工学専攻 准教授)
 根岸 雄一 君(化学科 1996年卒 東京理科大学理学部第一部応用化学科 教授)
 小澤 英昭 君(電気工学科 1986年卒 日本電信電話株式会社 メディアインテリジェンス研究所 所長)
 水島 一郎 君(電気工学科 1984年卒 東芝デバイス&ストレージ株式会社 先端ディスクリット開発センター 先端エピ・プロセス開発部 部長)

また、当日はあわせて平成28年度矢上賞(起業支援)の表彰を行います。

山田 泰之 君(機械工学科 2009年卒 中央大学理工学部精密機械工学科 助教)
 飯田 哲也 君(管理工学科 2006年卒 株式会社 BARREL PARTNERS 代表取締役/株式会社 JQ 取締役)
 藤田 英輝 君(システムデザイン工学科 2003年卒 SEGNET Ventures 代表)

授賞式典ならびに講演会には参加費無料、事前申込み不要で参加していただけます。

詳細は理工学部ウェブサイト (<http://www.st.keio.ac.jp/ygprize/>) をご覧ください。



昨年の授賞式典・講演会の様子

人とインタラクションできる人工知能

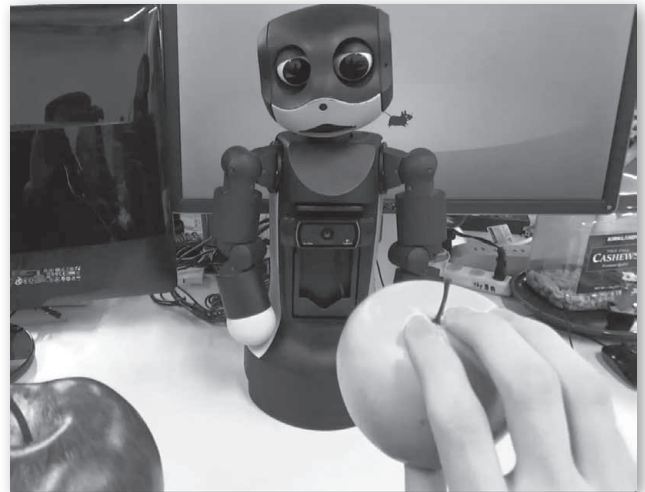
情報工学科 今井 倫太



人工知能ブームの中、国内の人工知能学会の会員数も創立以来、過去最高となりました。産業界から熱い視線が注がれていると同時に、人工知能が人の職業を奪うと危惧した発言もでています。人の仕事が、人工知能技術にとって変わる部分もありますが、人工知能に人類が征服されることはまだ当分起こりませんのでご安心ください。人工知能にできないことはまだ沢山あります。

人ができるのに人工知能で実現するのが難しいものにインタラクションがあります。インタラクションという言葉に馴染みが無い方は、コミュニケーションと読み替えてもらっても構いません。人と人がインタラクションするように、人とインタラクションできる人工知能やロボットは未だに登場していません。この人と人工知能のインタラクションを実現することが私の専門分野になります。すでに、携帯電話に声で問い合わせると天気を教えてくれたり、店頭でロボットがいたりするではないかと思われるかもしれませんが、しかし、「天気」と言う言葉で単純に情報検索していたり、人を楽しませる会話文が事前にロボットに登録されていて、それを適宜再生していたりするだけで、決して人のように相手の考えていることや感じていることを察して臨機応変に会話しているわけではないのです。

では、どうしたらいいのでしょうか？人工知能が、相手の気持ちを察する技術ができれば良いのですが、その実現は少し先のことになりそうです。研究室では、周囲の出来事にきちんと反応できるロボットで対処しようとしています。



人工知能が人の気持ちを読めないことも問題なのですが、人の方も人工知能（この場合はロボット）の気持ちを考えないことも問題だと考えたのです。

ようはこういうことです。あなたが店舗にいるロボットと話しているときに、近くで大きな物音がしたとします。しかし、そんなときにもロボットはその音を見捨てて会話を続けるでしょう。そのとき、あなたはこのロボットが自分と同じ世界を見ていないことに気がつくと思います。こんなロボットとインタラクションの文脈を共有できないと感じたり、共有していると思うことをばからしく感じたりしてしまうと思います。

研究室で開発したロボットは、呼吸したり、周囲の出来事に視線を向ける不随運動と、インタラクションの文脈に応じてジェスチャしたり頷いたりする随意運動を統合する仕組みを実現しました。統合されたロボットの動きは、人とインタラクションしながらも周囲の出来事にも適切に反応できます。店舗のロボットにこの行動統合の仕組みを組み込むことで、人がロボットと周囲の環境やインタラクションの文脈を共有できるようになると期待できます。人の仕事を奪うようなレベルのロボットにはならないでしょうが、同じ状況を共有していることを人に感じさせながら、人にお得な情報を伝えたり、人が要件を伝えなくなるロボットは実現できるのではないかと考えています。

日吉は今



総合教育科目に関する改革

高桑 和巳

自分の専門分野を大事にしつつも、他分野の知へと自らを開くことをためらわず、自分の世界認識を変更していく勇気のある人、それが教養人だとしましょう。次代を担う学生たちは教養人であらねばなりません。

じつを申せば、教養を教えることは不可能です。教養の種は、ひょんなことから精神に飛び火するという以外のしかたで人に入りこむことはない。とはいえ、飛び火のチャンスを何ほどか仕組んでやることはできる。総合教育科目はそのようなチャンスのひとつです。

自然科学に触れる機会の多い理工学部学生に対しては、それ以外の学問領域（人文・社会・学際）にアクセスするという条件が設定されることが肝要です。そこで、2017年度の1年生からは、人文・社会・学際に属する日吉の総合教育科目を「系列X」というカテゴリーにまとめ、卒業までにそのなかから4単位を取得する必要があるとしました（理工学部設置の総合教育科目に関する取得単位下限についての規定は、これと引き換えに廃止されます）。

矢上にも、「比較宗教学」「国際政治学」「紛争解決学」の3講義科目、および「人文社会科学演習」6科目、合計9科目の総合教育科目を新設しました。

もっと教養を！



第18回矢上祭の開催について

本年も矢上祭の時期が近づいて参りました。

矢上祭は今年で18回目を迎えます。矢上祭の礎となった多くの御縁に感謝するとともに、毎年のご理解・ご支援に深く御礼申し上げます。

第18回のテーマは「vivid」です。エリアごとのテーマカラーに塗り分けられた色彩豊かなキャンパスは、視覚から楽しい空間で皆様をお迎えします。

本年も科学実験を体験できる科学館、研究室の一部をご紹介する研究室ツアー等、理工学部ならではの企画を多数ご用意しております。また、幼いお子様にはグラウンドで楽しく体を動かせる企画、中高生にはハイクオリティな高校生クイズや生活相談ブース、大学生にはレベルの高い大学対抗アカペラ大会（新企画）など、幅広い層に合わせた企画をお楽しみいただけます。

また、本年より公式キャラクター「やがぼん」も登場し、実行委員一同、万全の体制で皆様のご来場をお待ちしております。是非とも足をお運びください。

日時：2017年10月7日（土）12:15～19:00、8日（日）10:00～19:00

場所：矢上キャンパス

矢上祭ウェブサイト：<http://yagamifestival.com/>



KEIO TECHNO-MALL 2017（第18回 慶應科学技術展）開催について

慶應義塾先端科学技術研究センター（KLL）では、理工学部・理工学研究科における研究成果を社会に還元し、産業界との連携を強力に推進することを目的として、KEIO TECHNO-MALL（慶應科学技術展）を開催いたします。本年も実物や実演を重視した展示により新しい研究成果を積極的に発表していくほか、学外から講演者を招いてのトークセッションイベント等、多彩で魅力的な内容を予定しております。ご多忙とは存じますが、多くの皆様のご来場を心よりお待ち申し上げます。

日時：2017年12月15日（金）10:00～18:00

場所：JR有楽町駅前 「東京国際フォーラム 地下2階（ホールE2）」

イベント：山崎直子氏による特別基調講演、玉塚元一氏・小林一俊氏・生田久貴氏によるトークセッション等

※ 詳細はKLL ホームページ（<http://www.kll.keio.ac.jp/>）をご覧ください。

理工学部報 第66号
2017年9月20日発行

発行者 武内 孝治
編集 理工学部報編集委員会
責任者 勝良 健史

発行 慶應義塾大学理工学部
〒223-8522
横浜市港北区日吉3-14-1
電話 (045) 566-1454 (ダイヤルイン)
印刷所 (有) 梅沢印刷所